

24.41
158
41

李朝實錄

第四十二冊

肅宗實錄 第三

學習院東洋文化研究所刊

李朝実録四十一冊奥付

昭和四十年三月二十五日

東京都荒川区日暮里町六一五〇〇

都印刷株式会社印刷

東京都豊島区目白町一〇五七

学習院東洋文化研究所刊行

編纂刊行責任者 末松保和

新平堂
PDG

肅宗実録解説

〔一〕李朝の第十九代の王肅宗は、諱は煥、字は明普、顯宗の第一男、顯宗二年辛丑（一六六一）八月十五日辛酉、慶熙宮に生れた。八年丁未（一六六七）王世子に冊封せられ、十五年甲寅（一六七四）八月二十三日甲寅、昌德宮に即位、在位四十六年、庚子（一七二〇）六月八日癸卯、慶熙宮に薨じた。春秋六十。母は明聖王后金氏（清風、佑明の女）、妃は仁敬王后金氏（光州、万基の女）、繼妃は仁顯王后閔氏（驪興、維重の女）である。

〔二〕この王代の実録は、景宗即位年（一七二〇）十一月に編修を開始、英祖三年（一七二七）九月、一応出来上っていたが、政治の局面が俄かに転換して、改修の議おこり、翌四年二月のころに改修の業も成って印刷された。

〔三〕この王代四十六年間は、党争の最高潮期であった。はじめ六年間（一六七五～一六八〇）の南人優勢の一期が終って、西人が再び政権をとったが、南人はなお復活の望みをすてなかつた。これに対する西人の方策には、緩急両極あり、西人の老論・少論への分裂の機は、其間に発生しそして熟した。肅宗二十年（一六九四）のころより二十余年間、老・少、互に政権を争いつづけ、最後の年（一七二〇）には政権は老論の手中にあった。

〔四〕この実録の編修された九年間（一七二〇～一七二八）、また老論・少論のめまぐるしい転換がくりかえされた。英祖三年（一七二七）七月の政変は、李光佐を首脳とする少論の勝利であった。あたかもそのころ、この

実録はすでに一応の編修を終えていたが、その全体的筆色が老論的であつたので、李光佐は政權を握るとともに、自から編修総裁となり、宋寅明をしてその改修に力をつくさしめた。しかし根本的な改修ができるほど政局は安定しておらず、改修に反対する声もかなりあつたので、既成の原稿はそのまま認めるとともに、各卷末に「補闕正誤」を付載した。前者をもつて老論的筆色とすれば、後者は少論的筆色とみなされよう。かくて定着した肅宗実録は、全六十五卷のうち、第四、第五十の両卷をのぞいて、みなそれぞれに「補闕正誤」が付けられて、肅宗実録は、実質的には老論の実録と少論の実録と、二つの実録を後世に残したことになる。

〔五〕この実録の現存するものは、江華本・太白山本・赤裳山本の三部で、いずれも同一の活字印刷本である。板匡、縦四・二五糎、横二七・〇糎、每半葉十五行、行三十字。

〔六〕昭和七年（一九三二）の京城帝国大学法文学部景印本は、太白山本に拠り、それを約二分の一に縮刷したものである。但し製冊は旧のまま和装七十三冊とした。

〔七〕いまここに刊行する普及版李朝実録第三十九、四十、四十一冊の肅宗実録は、財団法人東洋文庫所蔵の京城大学景印本に拠り、それをさらに縮写して、原本の四頁を一頁におさめたものである。

昭和四十年二月

学習院東洋文化研究所

末 松 保 和

肅宗實錄(第三)目錄

卷四十三

丙戌三十二年(西曆一七〇六)

正月庚申朔

一

二月庚寅朔

三

三月己未朔

五

四月戊子朔

七

五月戊午朔

九

六月丁亥朔

二

七月丙辰朔

八

補闕正誤卷四十三

元

卷四十四

丙戌三十二年

八月丙戌朔

七

九月丙辰朔

四

十月乙酉朔

五

十一月乙卯朔

五

十二月乙酉朔

六

補闕正誤卷四十四

六

卷四十五

丁亥三十三年(一七〇七)

正月乙卯朔

六

肅宗實錄(第三)目錄

補闕正誤卷四十五

卷四十六

戊子三十四年（一七〇八）

正月己酉朔

..... 一〇

二月戊寅朔

..... 一五

三月戊申朔

..... 二〇

閏三月戊寅朔

..... 二五

四月丁未朔

..... 三〇

二月甲申朔

..... 〇

三月甲寅朔

..... 五

四月癸未朔

..... 一〇

五月壬子朔

..... 一五

六月壬午朔

..... 二〇

七月辛亥朔

..... 二五

八月庚辰朔

..... 三〇

九月庚戌朔

..... 三五

十月己卯朔

..... 四〇

十一月己酉朔

..... 四五

十二月己卯朔

..... 五〇

補闕正誤卷四十七

卷四十八

庚寅三十六年（一七一〇）

正月丁卯朔

一五

二月丙申朔

一六

三月丙寅朔

一七

四月丙申朔

一八

五月乙丑朔

一九

六月乙未朔

二〇

七月甲子朔

二一

補闕正誤卷四十八

卷四十九

庚寅三十六年

閏七月甲午朔

二二

八月癸亥朔

二三

九月壬辰朔

二四

十月壬戌朔

二五

九月戊辰朔

二六

十月己亥朔

二七

十一月戊辰朔

二八

十二月丁酉朔

二九

補闕正誤卷四十九

十一月辛卯朔.....一五
十二月辛酉朔.....一六

卷五十上

辛卯三十七年（一七一）正月庚寅朔

.....一七

二月庚申朔.....一八

三月庚寅朔.....一九

四月己未朔.....二〇

五月己丑朔.....二一

六月己未朔.....二二

七月戊子朔.....二三

補闕正誤卷五十上

卷五十下

辛卯三十七年

八月戊午朔.....二四
九月丁亥朔.....二五

十月丙辰朔.....二六

十一月丙戌朔.....二七

十二月乙卯朔.....二八

卷五十一

壬辰三十八年（一七二）正月乙酉朔

.....二九

補闕正誤卷五十一

卷五十二

壬辰三十八年

二月甲寅朔.....三六

三月甲申朔.....三五

四月癸丑朔.....三四

五月癸未朔.....三五

六月癸丑朔.....三六

七月壬午朔.....三四

八月壬子朔.....三六

九月辛巳朔.....三七

十月辛亥朔.....三四

十一月庚辰朔.....三八

十二月庚戌朔.....三九

補闕正誤卷五十二

卷五十三

癸巳三十九年（一七二三）

正月己卯朔.....三八

二月己酉朔.....三四

三月戊寅朔.....三八

四月戊申朔.....三二

補闕正誤卷五十三

五月丁丑朔.....三五

卷五十四 癸巳三十九年

閏五月丁未朔.....三四

六月丙子朔.....三五

七月丙午朔.....三八

八月丙子朔.....三三

九月乙巳朔.....三四

十月乙亥朔.....三七

十一月乙巳朔.....三四〇

十二月甲戌朔.....三四三

補闕正誤卷五十四

卷五十五

甲午四十年（一七一四）正月癸卯朔

.....三四七

二月癸酉朔.....三四七

三月壬寅朔.....三四八

四月壬申朔.....三四九

五月辛丑朔.....三四九

六月辛未朔.....三四〇

補闕正誤卷五十五

卷五十六

乙未四十一年(一七一五)正月戊戌朔

七月庚子朔	三十一
八月庚午朔	三十四
九月己亥朔	三十九
十月己巳朔	三十三
十一月己亥朔	三十四
十二月己巳朔	三十五
二月己巳朔	三十七
三月丁酉朔	三十九
四月丙寅朔	三十九
五月丙申朔	三十七
六月乙丑朔	三十七
七月甲午朔	三十七
八月甲子朔	三十七
九月癸巳朔	三十七
十月癸亥朔	三十五

補闕正誤卷五十六

卷五十七

丙申四十二年(一七一六)正月壬辰朔

十一月癸巳朔.....三九
十二月癸亥朔.....三八

二月壬戌朔.....三八

三月壬辰朔.....三七

閏三月辛酉朔.....四三

四月庚寅朔.....四六

五月庚申朔.....四七

六月己丑朔.....四九

補闕正誤卷五十七

卷五十八

丙申四十二年

七月戊午朔.....四二

八月戊子朔.....四九

九月丁巳朔.....四三

十月丁亥朔.....四六

十一月丁巳朔.....四九

十二月丁亥朔.....四一

補闕正誤卷五十八

卷五十九

丁酉四十三年(一七一七)正月丙辰朔

二月丙戌朔

三月丙辰朔

四月乙酉朔

五月甲寅朔

六月甲申朔

補闕正誤卷五十九

卷六十

丁酉四十三年

七月癸丑朔

八月壬午朔

九月壬子朔

十月辛巳朔

十一月辛亥朔

十二月辛巳朔

補闕正誤卷六十

卷六十一

戊戌四十四年(一七一八)正月庚戌朔

二月庚辰朔

補闕正誤卷六十一

卷六十二

戊戌四十四年

補闕正誤卷六十二

卷六十三

己亥四十五年(一七一九)正月甲戌朔

三月庚戌朔	五三五
四月己卯朔	五三九
五月己酉朔	五三五
六月戊寅朔	五四〇
七月戊申朔	五四三
八月丁丑朔	五四七
閏八月丙午朔	五五〇
九月丙子朔	五五三
十月乙巳朔	五五七
十一月乙亥朔	五六〇
十二月甲辰朔	五六三
正月甲戌朔	五六六
二月甲辰朔	五七三
三月甲戌朔	五七七
四月癸卯朔	五七九

補闕正語卷六十三

卷六十四 己亥四十五年

五月癸酉朔	五八三
六月壬寅朔	五八六
七月壬申朔	五九〇
八月辛丑朔	五九二
九月庚午朔	五九八
十月庚子朔	六〇三
十一月己巳朔	六〇六
十二月己亥朔	六〇八

補闕正語卷六十四

卷六十五 庚子四十六年(一七二〇)正月戊辰朔

二月戊戌朔	六一
三月戊辰朔	六二
四月丁酉朔	六五
五月丁卯朔	六六
六月丙申朔	六七

補闕正語卷六十五

佐竹常卷元

肅宗顯義先倫聖聖英烈章文憲武敬明元孝大王實錄卷之四十三
三十二年丙戌正月朔庚申備忘記下監司留守曰噫願春生天地同和而
露之惠結實亦被而表我同胞之民尊運饒某獨佔危亡為民父母當作何樣
意頻年不給公和藩然設驅逐而聚較不多八路呼哺之赤子若何以善為
清結無一指痛耶合及于此不覺氣短也噫願民之責付諸卿等賑救之勤否
而民生之死生係焉其可忽哉咨爾方伯思寡昧如傷之意體爾前冬別輸之言
視民之艱若已之艱然始必以至誠則庶可有濟矣仍念災者天下之大本也
人事莫於前而後地事成於後是以孟春之月嘗修封禪審地終藉農固為應
振陰陽隔土地兩宜五穀兩殖以教導民者蓋此意也雖在當年勸農固為應
先之務而爾當大使之歲乎至宜惕念更加申飭或給種糧或警懶惰毋使田
野荒廢是亦方伯之職也仰其知悉舉行且以前後理葬餓死人等歲月已久
不無露出之患下教京兆使之另飭各郡一審察著實理瘞以存掩骼埋胔
之意○辛酉工曹參判李光迪進八策一曰更始二曰建極三曰體元四曰開
養五曰王道六曰虛受七曰篤恭八曰行健更始之章曰乾道更始奮而乃開
陽德更始劇而乃復景命更始我后復位於千萬年自今伊始命令自天舊邦
丙戌

肅宗實錄卷之四十三

一

維新重熙大業轉洪鈞萬物咸觀如日赫中衛教那教養於咄噶建極之章
曰維自今始蓋建皇極不偏不倚無反無側會極歸極無有比德則亡泰二
戒大澤保合太和聚精會神灑灑肅肅咸與維新同寅協恭勗我臣隣體元之
章曰維自今始蓋體乾元在天為元心為仁猶我元仁長人惠澤恩政
同臨王春雲行兩地萬物資始若古聖王如保赤子春和順應同俾春長春
之章曰維自今始蓋如存養萬化本原主蓄心物上順應同若明鏡萬幾雖
煩何事勞擾惟慎御煩惟靜制動治心治大只在方寸坎離既濟易象象既王
道之章曰維自今始王道萬年無私照臨日月重明中正純輝光大含弘開
闢外宮府一體正路開闢私實則閑德施斯斯物咸于聖化如天民無從名
正從德德馨朕好察遠言舜有大馬聞善則拜為無聞然思齊二聖其永無
愆篤恭之章曰維自今始聖心篤恭不大有容成突元起德若摧山
物各付物天君泰然未發為中後而中不貳不還阿何移已師聖忘怨庶幾
無疾行健之章曰維自今始體天行健如舜執耒耨耨不顧自強不怠四時合
序而無違步歷年而天祿永享允膺昭祐悠久同天八千為春臣拜稽首請

祝聖人上優答之○大司成李健命上疏曰柳風輝力言洪受虛之罪臺章
繼後罪名雖藉臣與受虛久在銓席其中郎官已塞復通一教臣實與閣下不
當以一人之見細廉諸人因一時疏失而永棄軍實是理論謂日改何惡相反
通者亦多而未聞其一實問於初塞之人以此為察孰能免渴飢之罪且儒
臣重臣出入是職俱非一再何不刺舉於重臣秉鈐之日乃反並發於聖教
薄之後奏嫌嫌難恐不及良可異也當今李夏源持平李明俊執最李萬選
以之引避正言鄭絅以曾塞復通一教陳疏奏者尤源升健命上答曰爾等既
有廷教在健命之道惟當奮忠之志不暇而肆技疏辭氣忿忿子實深惡也禮
曹參判全宇抗以曾塞銓席與閣下通清上疏引咎以為益長通清非今創始
承傳定制貽費輟錄已成今甲以此執言歸之渴飢已極不聽臺府擬給餘論
不有定制制輟錄成一案以律律之計吁亦甚矣答曰辨弊之說子實未曉論
夏源明俊等又引避處置出仕○辛亥全州等四邑去十月十五日地震道
臣狀聞○以李孝經為承旨趙相恩為大司憲朴台東為正言金斗南為文學
丙戌

肅宗實錄卷之四十三

二

抄述為司書趙奎一為修撰李晚聖為兼司書○乙丑以魚史繼為承旨李晚
聖為兼司書趙奎一為修撰李晚聖為兼司書○乙丑以魚史繼為承旨李晚
教長吏之徽當有別操處斯之道上命食致東家欲推治○校理具命峻以簡
以制煩所慎在疾速於得人三事作策以進上優批嘉納○丁卯以金昌集
為判尹鄭載禧為左參贊李奎為大司諫○己巳為都日政以金宇抗為京畿
觀察使趙泰老為江原道觀察使許璣為承旨金一鏡為文學李緯為無職書
李邦秀為觀書尹行教為副應教李宜顯為副校理李坦為副修撰○右議政
徐宗泰上立一疏上手書勉出曰卿之清操德德博識雅量夙負公輔之望
今茲特命更立非予一人私意也雖以原任大臣創語觀之公議所在灼然易
見於御堂有一毫難安之端而違章累牒一向擱置此無非情志不孚之咎可
勝愧慙况疾病之作亦由江村之荒涼慮念彌深慮自今國勢無一可恃協心
圖理猶懼不充而廟廟久空吹對久展言合國事中夜無寐茲以手書中告至
意此時望卿何書雲霓而已卿其體諒即起視事少紓予庸醫之懷○庚午都
日政以尹行教為應教無期善判判明為兼司書南就明為司諫李肇為觀察
韓配夏為掌令李排為校理金典慶為修撰崔錫恒為副提學沈壽賢為觀書